

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 泉直亮

【所属】 京都大学アフリカ地域研究資料センター

【研究題目】

東アフリカにおける豪農と小農の相克・共生に注目した農村の発展に関する地域研究

【研究の目的】

東アフリカ農民は小農が中心であったが、近年では大規模な生産をおこなう農民も増加している。たとえば申請者は、タンザニアにおいてスクマの人びとが周囲の小農を雇用し、大規模で企業的な経済活動をおこなっていることを確認してきた（泉 2013）。こうした経済的に突出した「豪農」の存在は、地域社会に経済発展をもたらすと同時に、経済格差を引き起こす。世界の各地で世帯間の格差が顕在化している現在、この問題はその地域の発展を考えるためには不可欠な問題である。

以上のような理由から申請者は、「豪農」の存在を視野にいれて、従来のアフリカ農村の生存基盤や内発性を重視する農村発展を検討する必要があると考える。本研究が対象とする豪農スクマと小農ワンダは、小さなもめごとを起こしつつも、大きな争いをすることなくひとつの地域で共存してきた。本研究は、経済格差のある両者による相克の関係と、格差社会だからこそ生み出される共生的な関係をあきらかにする。

【研究の内容・方法】

以上の目的を達成するために、本研究では 2015 年 6 月から 9 月までおよそ 3 か月間のフィールドワークを実施した。調査対象とする地域は、タンザニア南西部のルクワ平原に位置するキリヤマトウンドウ村であり、ここは豪農スクマと小農ワンダが共存する主要な地域である。調査の概要とその結果からあきらかになったことは、以下の 2 点である。

第一に、スクマとワンダの経済的な関係に注目して、スクマ 74 世帯とワンダ 80 世帯について各世帯の生産として世帯の「構成人数」、「ひとりあたりが飼養するウシの頭数」、「ひとりあたりのコメの生産量」を比較した。マン・ホイットニ検定をもちいてスクマ世帯とワンダ世帯の差を検定した結果、すべての比較項目で有意差が認められた。すなわち、スクマはワンダとくらべて、生産の単位である世帯、その世帯でおこなわれる生産ともに大規模である。また、この差異は雇用関係にもあらわれている。約 72% のスクマ世帯がワンダを雇って生産を拡大する一方で、雇用されるスクマ世帯はひとつもない。それに対して、ワンダ世帯では雇用する世帯はわずかに 5% である一方で、約 49% の世帯が雇用されて生計を維持している。なお、これらの世帯はすべてスクマ世帯に雇用されている。

第二に、食糧不足という危機への対処について検討した。小農であるワンダ世帯では食糧の剰余生産が少ないのに対して、スクマ世帯では剰余生産が豊富であった。そのため、主食作物が不作だったときには、多くのワンダが食糧を求めてスクマ世帯を訪れていた。これに対してスクマは、無料で食糧を配布することはなかったものの、訪れたワンダからの要求に応じて畑の除草などの労働を提供し、その報酬として穀物を支払っていた。この労働は、スクマ側からすれば「やる必要のない労働」であった。すなわちスクマは、雑草がほとんどないために除草する必要がない畑でワンダを雇って、食糧を支払っていたのである。

【結論・考察】

スクマとワンダとのあいだには、あきらかな経済格差が確認された。また、多くのスクマ世帯はワンダを雇用して生産を拡大する一方で、ワンダ世帯はスクマ世帯に雇われることで生計を維持していることから、

両者のあいだには経済的な相互依存の関係がある。経済的に裕福であるスクマは、本来ならば「やる必要のない労働」を公共事業のように作り出して、ワンダの食糧不足を救済していた。経済格差は一般的にも社会を不安定にすることが指摘されているが、アフリカ農村でも経済的に突出したものは妬みの対象となり、相克の要因となる。「豪農」であるスクマは、ワンダのセーフティネットの機能を担うことで、ワンダから求められる富者としての責務を果たし、みずからの財を保持している。本研究の結果からあきらかになったのは、このような豪農と小農の共生のありかたである。将来的には、経済格差による対立が顕在化したり小農の生存維持基盤が脆弱化したりする懸念が考えられるが、それは今度の研究課題としたい。

【参考文献】

泉直亮 2013「東アフリカ農牧社会における経済活動の現代的展開：タンザニア・スクマの移住と豪農化」『年報人類学研究』3: 42-73。